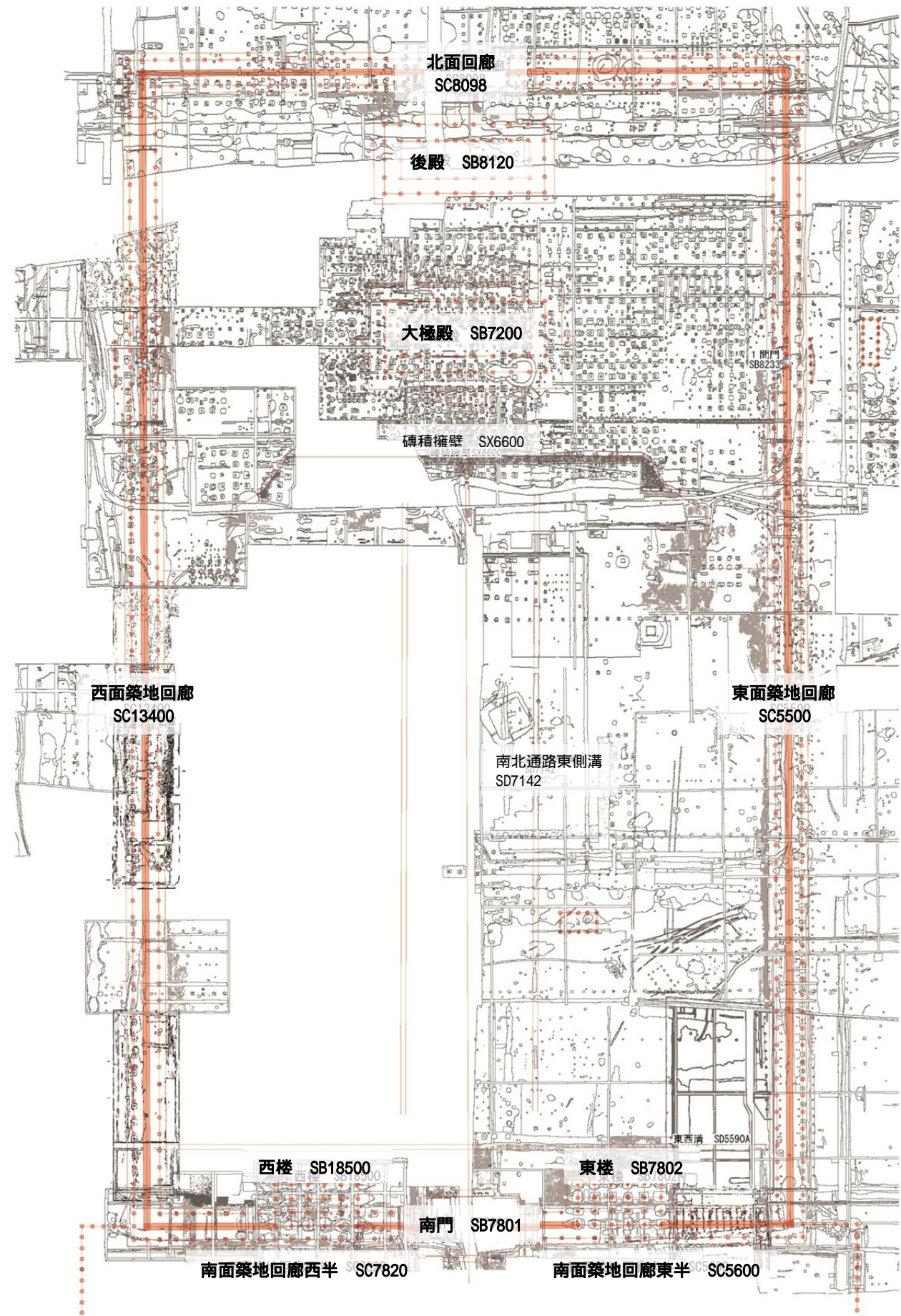
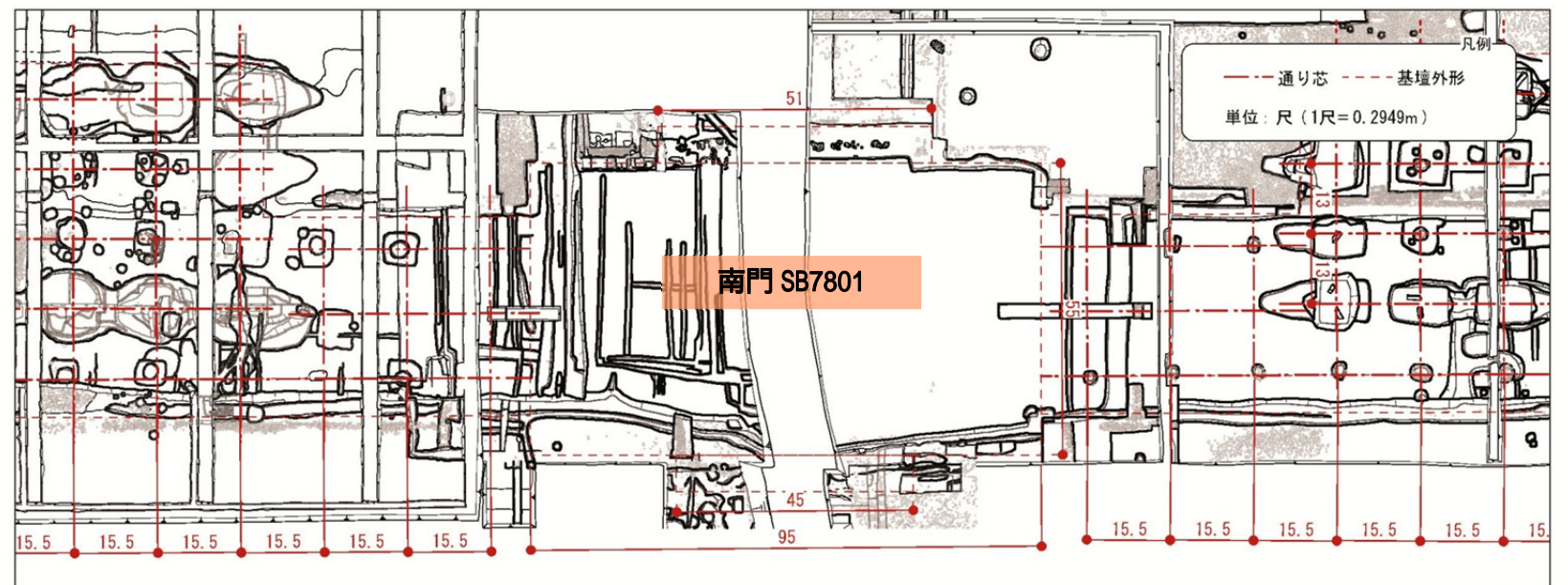


## 平成24年度 第一次大極殿院復原検討 課題と主な検討事項

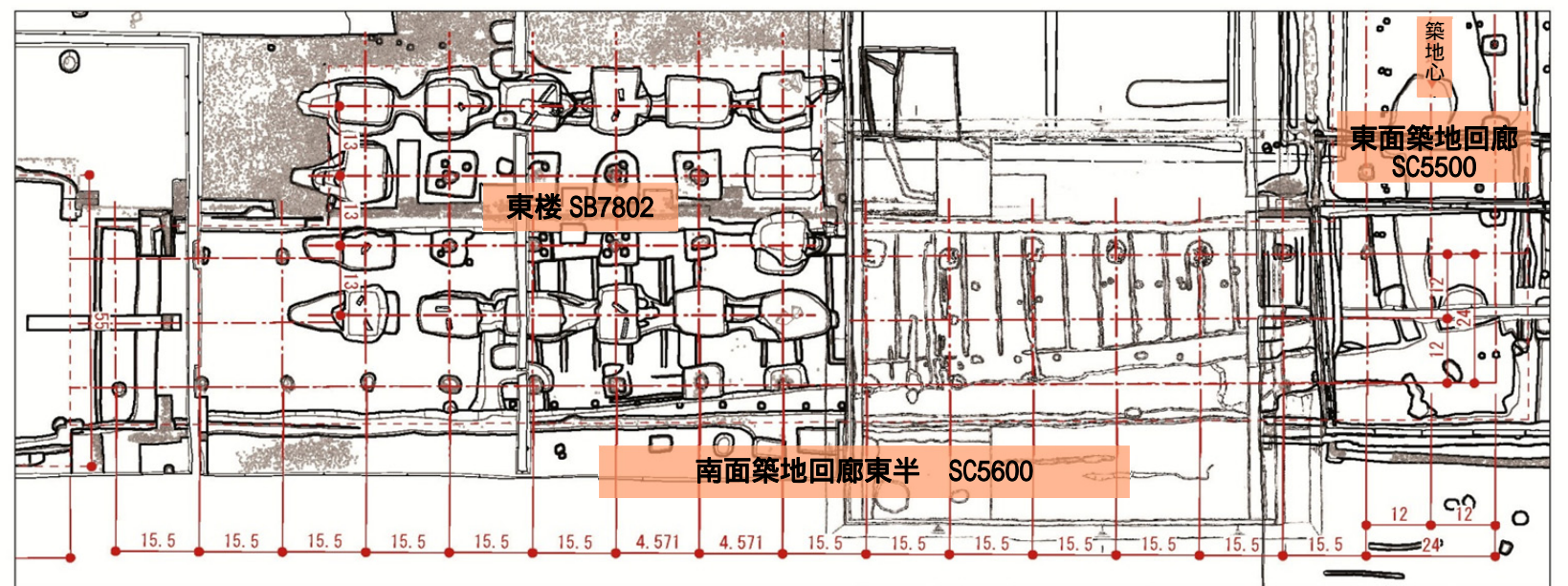
	名称	H22-23年度の検討事項	H22-23年度の決定事項	根拠	これまでの検討会での課題	H24年度の検討事項	備考
個別	南門	・既往の復原案の検証 ・文献検討 ・遺構の再検討 ・単層or重層および柱配置の検討 (平成17年度に新たに発掘調査した南面階段についての成果を加味)	・文献からは形態等不明 ・基壇規模95×55尺(基準尺・地覆石規模の検討を経て決定) ・桁行5間×梁行2間の重層門 ・三手先組物(検討の前提条件:単層は手先なし、重層は三手先) ・二重門柱配置6案、楼門柱配置6案(下層のみ)	・発掘遺構の再解釈(基壇平面規模、南面・北面の階段幅等) ・国内の門類例(発掘29例、現存96例)の基壇規模と重層or単層の関係、桁行両端間と梁行の柱間関係、回廊との取り付け部分の柱間と門本体の柱間などの関係	・二重門か楼門か ・上下層柱間寸法 =上層の透減・回廊までの柱間 ・回廊取り付け部の柱間寸法 ・単層三手先建築の再検討の必要性	・二重門か楼門か ・上下層柱間寸法 ・透減(現存する門建築は新しい遺構が多く、何をもって透減の根拠とするか)柱盤使用重層建築類例の収集) ・具体的な上部構造の検討	規模・形式を決める根拠を整理して、上部構造の検討へと進捗させる
	東西楼	・既往の復原案の検証 ・文献検討 ・遺構の再検討 ・構造の要所 (柱配置、掘立の側柱・礎石建の内部柱をもつ遺構の特徴・類例、出土隅木蓋瓦)	・文献からは形態不明 ・側柱を通柱とした楼造建築 ・上層は内部柱なし(身舎のみ) ・隅木は真隅とする ・礎石内部柱は最大約45cm径の束柱 ・妻梁を用いた上部構造	・柱配置(発掘成果) ・発掘遺構や土層との関連 ・径約72cmの出土柱根(側柱) ・礎石掘立併用の類例(発掘26例) ・古代寄棟造類例(現存18例) ・妻梁を使用する類例(現存58例)	各検討会で大きな課題は挙がっていないものの、類例の少ない構造を想定せざるをえない	・具体的な上部構造の検討(:上層床の構法・架構・組物・天井・屋根形式) ・築地回廊取り付けの検討(裳階の類例調査) ・腰組・高欄の検討(類例調査)	上部構造は、架構・組物・天井・屋根形式を一体として考える必要あり
	築地回廊	・既往の復原案の検証 ・文献検討 ・遺構の再検討 ・基準尺・回廊規模・基壇規模・柱位置等(南面・西面回廊の新たな発掘調査成果を加味) ・築地基底幅 ・門の検討(文献・遺構・遺物)	・文献による形態・使用方法など ・南面回廊基準尺=大極殿院東西方向の基準尺(他の建物にも適用) ・南面回廊の基壇幅と柱位置 ・東面回廊柱配置(案) ・東西面回廊の北部に開く門 ・軒の出	・発掘遺構(座標・標高を含む) ・東面回廊北部に開く門 ・回廊や築地に開く門類例(発掘29例、現存14例) ・足場遺構の規則的配置	・東面回廊の柱間寸法 ・東西面および南面築地回廊に開く門位置、規模、形式 ・築地基底幅と高さ(類例の収集と検討) ・基壇各所の高さ、傾斜(院内外の地形)	・出土遺物からの基壇の仕様 ・西・北面回廊の柱位置、北門の位置や規模の検討 ・築地高さ ・築地寄柱の有無、寸法 ・基壇と屋根の傾斜と変換点	大極殿や磚積擁壁等の位置の関係も考慮して、総合的に考える
	内庭部	・遺構各所の座標と標高 (南面・西面回廊の新たな発掘調査成果を加味) ・排水系統を整理 ・斜路の形態(磚積擁壁高・傾斜)	・磚積擁壁の高さ(7尺・27段) ・斜路周辺屈曲点位置と傾斜	・遺構実測図による座標・標高 ・大極殿基壇や回廊雨落溝との関係	・磚積擁壁上端部の納まりとその上の高欄の有無と仕様 ・擁壁部以外の磚の使用の有無とその納まり	・地形と標高 ・中央通路の認定と仕様 ・磚の分布・地形 ・井戸と幢竿支柱	全体的な課題については整理済み(第8回検討会) おおむね遺構からの検討が可能
共通	木部	・柱径(東楼所用柱根、西楼出土礎石の検討)	・東西楼側柱径:約72cm ・回廊側柱および東西楼礎石内部柱は最大径:約45cm	出土遺物	各検討会で大きな課題は挙がっていない	・木割りの方針	・樹種は『平城報告XI』で報告済 ・隅木蓋瓦や瓦の寸法から部材の寸法や垂木ピッチなどを検討できる見通し
	基壇	・基壇外装(第一次大極殿院地区出土石材の検討)	・出土凝灰岩を、期回廊または東西楼の基壇外装材と評価して復原に生かす	出土石材の大きさや特徴	・各建物の基壇形式と高さ(回廊内外の基壇高の差あり) ・新たに発見された出土石材(第一次大極殿院地区)	・出土遺物 ・各建物の基壇高(回廊内外) ・基壇外装、上面の仕様 ・階段の仕様	建物の高さを考えるために基壇高の決定が必要
	礎石	・西楼出土礎石の検討	・西楼出土礎石の所用建物は、築地回廊・東西楼どちらの可能性も考えられる(柱径は最大でも45cm程度)	礎石上面の寸法	各検討会で大きな課題は挙がっていない	・築地回廊の寄柱礎石 ・南門の礎石の大きさ(基壇高と関連)	各建築の検討との整合をとる
	瓦	・瓦の出土状況と隅木蓋瓦の検討 (南面および西面回廊周辺の新たな発掘調査成果を加味)	・鬼瓦や軒瓦の出土位置から門の位置を確定することは困難 ・隅木蓋瓦から、真隅か振隅かは確定できない	出土遺物	・各建物の所用瓦の寸法 ・鴟尾の使用の有無	・各建物の所用瓦の大きさ(垂木割との関連) ・隅木蓋瓦の寸法(東西楼隅木の寸法) ・回廊隅の特殊瓦等	各建築の検討との整合をとる
	柱間装置	なし	なし		なし	・各建物での柱間装置の認定 ・各柱間装置の仕様 ・現存、発掘事例の集成と分析 ・絵画資料の分析	各建築の検討との整合をとる
	金具	なし	なし		なし	・出土遺物の集成、検討 ・絵画資料の分析 ・現存事例の分析 ・類例調査	・考古資料と建築遺構・絵画資料を検討 ・各建築の検討との整合をとる
	彩色	なし	なし		なし	・瓦に付着した顔料の分析 ・遺物の集成、検討 ・絵画資料の分析 ・現存事例の分析 ・類例調査	同上



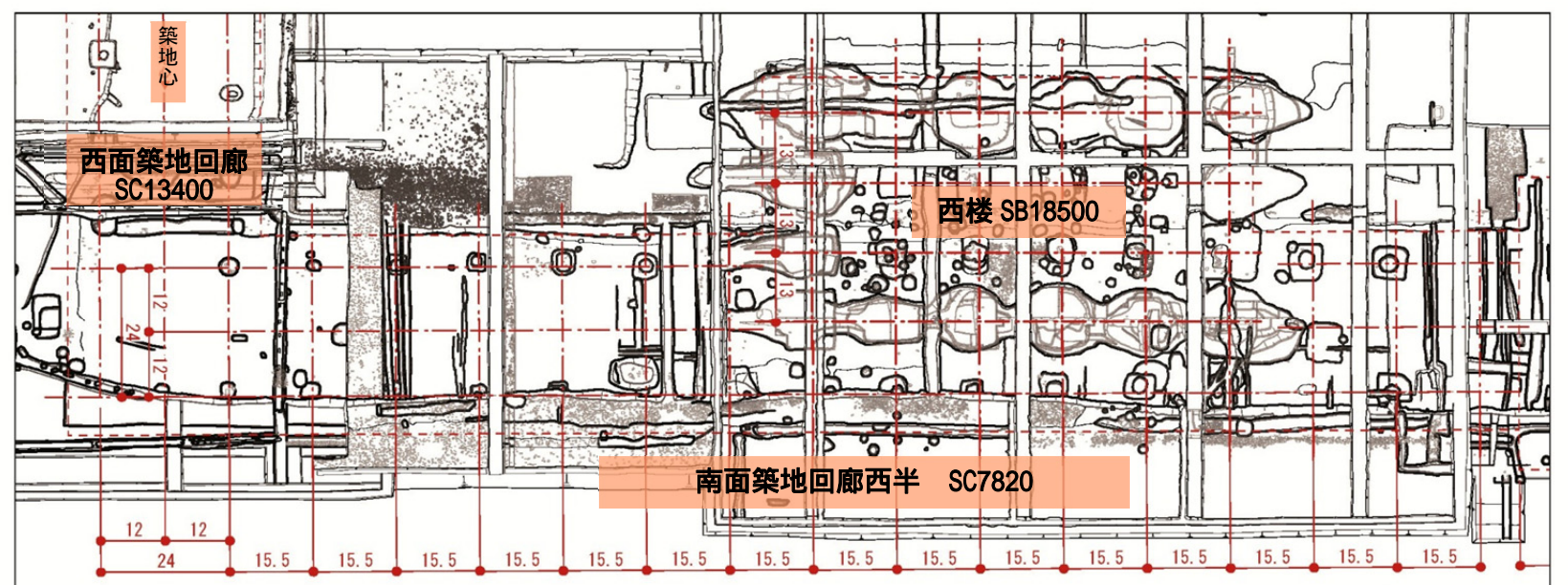
第一次大極殿院地域 I-2 期遺構配置図 1/1500



南門 SB7801 遺構図+平面模式図 1/400



南面築地回廊東半 SC5600 遺構図+平面模式図 1/400



南面築地回廊西半 SC7820 遺構図+平面模式図 1/400

第一次大極殿院南門 柱配置案 確定条件：重層、桁行5間×梁行2間、基壇規模95×55尺、北面あるいは南面の階段幅=桁行中央柱間3間、下層柱間寸法は完数尺

		下層柱配置の前提条件				下層柱配置				上層柱配置				遞減(総間)				回廊柱間との関係		基壇の出(尺)	下層柱配置 問題点	下層柱配置 評価
		1	2	3		4	柱間数 (桁行×梁行)	柱間寸法 (尺)		柱間数 (桁行×梁行)	柱間寸法 (尺)		(尺)		(率)		門中央柱間 が回廊柱間より 大/小	回廊との 取付き部分 柱間 (尺)				
		階段幅 = 桁行中央3間 (南面を採用：) (北面を採用：)	三手先 (重層)	-4期雨落溝 (基壇の出)		隅の間正方形		桁行	梁行		桁行	梁行	桁行	梁行	桁行	梁行						
二重門	案					×	5×2	12 15 15 15 12	15 15	5×2	11.5 14 14 14 11.5	13 13	-4	-4	0.94	0.87	小	21	桁行 13 梁行 12.5	・隅の間が正方形にならない ・回廊との取付き部分が広い	・雨落溝の位置を尊重	
	案						5×2	15 15 15 15 15	15 15	5×2	13 15 15 15 13	13 13	-4	-4	0.95	0.87	小	18	桁行 10 梁行 12.5	・-4期雨落溝の位置を踏襲していないため、基壇の出が正方形にならない ・隅の間正方形 ・回廊との取付きは案よりは自然である ・門の桁行柱間が等間である(宮殿類例に合致) ・長岡宮朝堂院南門と基壇規模を含めて近似	・隅の間正方形 ・回廊との取付きは案よりは自然である ・門の桁行柱間が等間である(宮殿類例に合致) ・長岡宮朝堂院南門と基壇規模を含めて近似	
	案					×	5×2	15 17 17 17 15	15 15	5×2	13.5 15 15 15 13.5	13.5 13.5	-3	-3	0.96	0.90						
案					×	5×2	15 17 17 17 15	15 15	5×2	14 15 15 15 14	14 14	-2	-2	0.97	0.93							
楼門	案 (隅木あり)					×	5×2	12 15 15 15 12	15 15	~H23年度未検討				小	21	桁行 13 梁行 12.5	・隅の間が正方形にならない ・回廊との取付き部分が広い	・雨落溝の位置を尊重				
	案 (隅木あり)					×	5×2	13 15 15 15 13	15 15							小	20	桁行 12 梁行 12.5	・隅の間が正方形にならない ・回廊との取付き部分が広い	・雨落溝の位置を尊重		
	案 (隅木あり)					×	5×2	12 15 15 15 12	14 14							小	21	桁行 13 梁行 13.5	・隅の間が正方形にならない ・回廊との取付き部分が広い	・雨落溝の位置を尊重		
	案 (隅木あり)						5×2	14 15 15 15 14	14 14							小	19	桁行 11 梁行 13.5	・-4期雨落溝の位置を踏襲していないため、基壇の出が正方形にならない	・隅の間正方形		
	案 (隅木あり)					×	5×2	15 15 15 15 15	15 15							小	18	桁行 10 梁行 12.5	・-4期雨落溝の位置を踏襲していないため、基壇の出が正方形にならない ・隅の間正方形 ・回廊との取付きは案よりは自然である ・門の桁行柱間が等間である(宮殿類例に合致) ・長岡宮朝堂院南門と基壇規模を含めて近似	・隅の間正方形 ・回廊との取付きは案よりは自然である ・門の桁行柱間が等間である(宮殿類例に合致) ・長岡宮朝堂院南門と基壇規模を含めて近似		
	案 (隅木なし) (切妻造)					×	5×2	17 17 17 17 17	20 20								大	14	桁行 6 梁行 7.5	・桁行柱間より梁行柱間が大きい ・現存する楼門切妻造は1例しかない(八坂神社楼門) ・遺構の信頼度の低い北面階段を採用している	・雨落溝の位置を尊重 ・回廊との取付きは自然である	

(参考) 既往復原案

単層門	学報案 単層切妻 基壇：94×55尺					(けらば)	5×2	15 17 17 17 15	20 20								大	15.5	桁行 6.5 梁行 7.5	・今回の検討会により重層の可能性が高い	
二重門	模型案 二重入母屋 基壇：94×55尺					(二手先)	5×3	12 17 17 17 12	12 12 12	5×2	12 13 13 13 12	12 12	-12	-12	0.84	0.67	大	18.5	桁行 9.5 梁行 9.5	・古代に二手先の現存事例はない ・端間が狭すぎる	・雨落溝の位置を尊重 ・隅の間正方形
単層門	平成14年度案 単層切妻 基壇：96×55尺					(けらば)	5×2	17 17 17 17 17	20 20								大	14.5	桁行 5.5 梁行 7.5	・今回の検討会により重層の可能性が高い	